海外学生派遣事業 終了報告書

氏名：	木村 大輔
所属：	総合研究大学院大学 複合科学研究科 情報学専攻
派遣先国名：	エジンバラ，イギリス
派遣先大学名：	エジンバラ大学
派遣期間：	2006 年 8 月 15 日〜2006 年 9 月 15 日
報告年月日：	2006 年 10 月 01 日

海外派遣先大学について

エジンバラ大学は 1583 年に設立され，全英屈指の規模と歴史を持つ名門大学である。研究活動は様々な分野について活発に行なわれており，オックスフォード大学やケンブリッジ大学に並ぶレベルを誇っているようである。私の専門分野である理論計算機科学についても，世界的に有名な研究者が数多く所属している。Philip Wadler 教授もその一人で，今回の学生派遣で私は Wadler 教授を訪問した。

図 1: エジンバラ大学構内

海外派遣の目的

私の博士過程研究のテーマはプログラミング言語理論，特に古典論理に対応する計算手続きの研究である。この研究テーマは 1990 年辺りから活発に研究されていて，様々な計算体系が提案されている。その中の一つの体系として Wadler 教授は 2003 年に双対計算 (dual calculus) を提案し，2005 年には dual calculus についての未解決問題を残していた。私はこの体系を研究し，Wadler 教授の未解決問題について一つの部分解を得ることが出来たので，この結果について Wadler 教授と直接会い，議論をすることがエジンバラ訪問の目的である。

海外派遣前の準備

以下の順番で準備をしました。

- 受け入れ先の教官との連絡
  まずは Wadler 教授と連絡を取り，エジンバラを訪問したいとの旨を伝えた。4 月末に日本で学会があり Wadler 教授が来日していたので，直接会って相談の上スケジュールを決めた。

- パスポート
  チケットの購入にはパスポートの番号が必要なので，パスポートをそれまでに取得しておく必要がある。パスポートが手に入るのは申請から 10 日ほどかかる。

- 飛行機チケット
  5 月末に旅行会社で飛行機の往復チケットを購入。日本からエジンバラへの直行便はないので，今回は成田 ⟶ ヒースロー (乗りかえ)⟶ エジンバラというコースであった。単身で海外へ行くのは初めての経験なので，荷物の紛失など様々なトラブルを出来るだけ回避しようと思い，航空会社を統一することにした。そのような理由から British Airways に決定した。飛行機代は夏休みで高めだが，お盆中に出発だと少し安い。諸々合わせて往復で約 17 万円だった。

- 宿の予約
  宿の確保は難儀した。8 月のエジンバラはフェスティバルシーズンで観光客も多いので，観光客が探すようなルートで色々当たってみても宿は見つからなかった。困り果ててエジンバラ大学に留学経験のある先輩に相談したところ，エジンバラ大学の訪問者向けのゲストハウスを斡旋しているエージェントを紹介してもらってようやく確保できた。ただし，一ヶ月の間に 4 つの宿を渡り歩くことになった。

上記と同時進行で書類手続きをしていた。派遣先の大学と総研大の間で公式な書類を交わす必要もあったので，国際郵便のやりとりも行なった。これらの事務手続きについて受け入れ先の教官とのメールのやりとりを何度もしていたのだが，それと同時に研究内容についての説明や質問などのメールも交わしていた。これにより議論するべき大まかな内容が伝わっていたので，直接会った時にスムーズに話が進んだ。

海外派遣中の勉学・研究

滞在中の研究スタイルは週に 1〜2 度（各 1〜2 時間）の受け入れ教官 (Philip Wadler 教授) とのミーティングであった。議論した内容は主に以下の 2 つの話題である。

(1) 自分が得た結果についての説明：何が問題点でそれをどのように解決したかを説明した。

(2) 上記の結果を更に良くするにはどうしたら良いか，その為にはどのような問題を解決しなくてはならないか。

後者については，更に時間を掛けて議論する必要があるので，帰国後も電子メールのやりとりで議論をしていこうとの結論に達した。

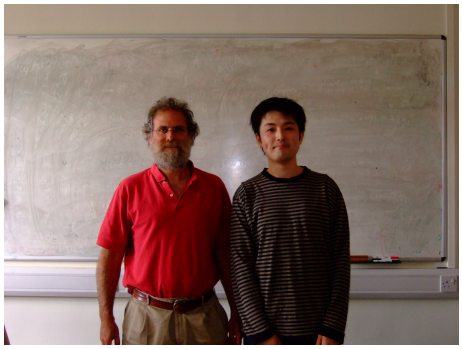

図 2: Wadler 教授のオフィスにて

海外派遣中に行った勉学・研究以外の活動

8 月のエジンバラはフェスティバル一色であった。エジンバラフェスティバルは幾つかのイベントが 8 月の間に集中的に行なわれている期間で，街中あちこちで音楽や歓声が聞こえていた。中心街を散歩しているだけでも楽しい気分になれるので暇を見つけては中心街を歩いたり，エジンバラ城の中を見学した。様々なイベントが行なわれるフェスティバルの中でも一番人気が Edinburgh Military Tattoo である。エジンバラ城を背景に催される音楽ショーで，50 年以上の歴史を誇っている。観覧するにはチケットが必要であるが，数ヶ月前から手を打たないと入手できないそうで，残念ながら観ることができなかった。

図 3: Military Tattoo

図 4: エジンバラ城内

海外派遣費用について

渡航費は往復で 171,160 円，宿泊費が一ヶ月で 868 ポンド (約 191,000 円) であった。合計約 362,000 円であり，残りは生活費，主に食費として利用した。滞在中は 4 つの宿を渡り歩いたが，そのうち 3 つは朝食つきであった。最も長期滞在した最初の宿だけは学生寮を夏休み期間 (8 月 31 日まで) だけ一般に開放している所だったせいか，食事つきではなく 3 食とも自分で調達する必要があった。

海外派遣先での語学状況

会話も標識も全て英語である。英国英語のせいか，発音は比較的聞き取り易かったように思う。最初に英会話が必要になったのは英国への入国時であった。いくつか質問を受けながら自分が英国でどれくらいの期間，どこで何をするのか簡単に説明した。また，日常生活でも簡単ではあるが言葉を交わす機会が日本より多かったように感じた。例えば買い物をするときは何か探していると店員が話しかけてきて，対話しながら欲しいものを見付けて購入するというようなことがしばしばあった。

海外派遣先で困ったこと

今回は出発からトラブルが続きの旅であった。出国直前の 8 月 10 日にロンドンのヒースロー空港でテロ未遂事件があった影響で手荷物検査は厳しくて時間がかかったし，ヒースローからエジンバラへの飛行機は遅延・欠航が相次いでいた。日本を出発する際に飛行機会社のカウンターでこの点について説明を受け，場合によってはヒースローで一泊することになるかもしれないと注意された。実際に予約していたヒースローからエジンバラまでの便は欠航していて，ヒースロー空港で 3 時間余計に待つ羽目になった。日本を出発後の急な予定変更のせいで到着時にトランクは届かず，到着した最初の晩は手荷物だけで異国の地で過ごすことになってしまった。翌日にエジンバラ空港で荷物を発見したが，それまではかなり不安な気持ちで過ごしていた。

日常生活で困ったのは英会話である。自分から話すときは言いたいことを考えてから話すことも

できるが，聞き取りが大変だった。もしも緊急事態に遭遇したときに状況の把握が素早く正確にできない可能性があると思うと常に不安感があった。やはり日頃から耳を慣らしておかないといけないことを痛感した。

帰国時もトラブルに見舞われた。大雨のせいでエジンバラ発の便が大幅に遅れてしまい，ヒースロー空港での乗継ぎが予定通りにはいかなくなった。結局また予定を変更する羽目になり，ヒースロー空港で 4 時間余計に過ごした。この時はエジンバラ出発前の予定変更だったので，荷物は無事に届いた。

海外派遣先を希望する後輩へのアドバイス

細かい注意点と感想をいくつか述べる。

- 生活で使う大抵の物は現地で購入できるが，電源の変換プラグだけは事前に日本で手に入れて持っていかないと相当苦労すると思われる。
- 滞在期間は食事の調達に悩まされた。宿泊した宿はどこもキッチンが充実していなかったので，自炊は困難であった。そこでまず大学内の食堂を探したが，あるのは昼のみ営業のカフェテリアだけで，品物もジャンクフードに近いものが多かった。次に，街中で日本の食堂やファミリーレストランに相当するような一人で気軽に入れる場所を探してみたが，ほとんど見つからなかった。どうやら外食は 2 人以上で語り合いながら食事をするような場所という前提になっているようで，一人ではどうにも入り難かった。他の学生や研究者にどうしているか聞いてみると，やはり普通は自炊するそうである。結局，スーパーの惣菜を利用する等でどうにか過ごしていた。もっと長期の滞在であれば，生活に必要な道具や設備を揃えたであろうが，今回は一ヶ月の滞在であったので身軽さが重要であった。そのせいで食事を始めとして生活上は多少の不便を感じた。やはり一ヶ月というのは長くもあり短くもある期間であった。
- 英国で発行されている紙幣は 50 ポンド札が最高額で，価値は 1 万円強であるが，どうも感覚が日本の 1 万円札とは異なるようである。50 ポンド札は「めったに使わない高額紙幣」という扱いのようで，それくらいの高額な買い物をするときにはクレジットカードを用いるのが普通のようだ。買い物時に 50 ポンド札を出すとほぼ例外なく透しを見たり手触りを確認したりと入念にチェックをしていた。時には受け付け拒否されることもあるので注意が必要である。中心街にある百貨店でも拒否されたことがあって驚いた。
- 当然ながら (今の時点では) 国内で使っていた携帯電話はまるで役に立たない。自分が如何に携帯電話に依存していたかを振り返ることができた。時計機能も日本時間のまま動かせなかったので，いちいち頭で計算していた。空港で海外でも使用可能な携帯の貸出しをしているので，どうしても必要ならそれを利用するのも良いかもしれない。

今回の旅の中で様々なトラブルに遭遇したし，その都度苦労もしたが，時には自力で解決したり時には周囲の人々に手助けしてもらいながら結局はどうにか乗り越えることができた。今から思えば，どれもとても良い経験であったと思う。まさに「案ずるより生むが易し」を実感した旅であった。